

「農民として幸せに暮らすために 始めた放牧酪農」

茨城県稲敷市 上野 裕さん（新利根協同農学塾農場）

1947年に祖父たちが水田として開拓し、1963年に祖父と父たちが酪農を始めた、利根河畔の湿地。2005年に初めて、思い切って牧草地に牛を放つてみた朝、牛たちは本当に嬉しそうに、生まれて初めてのはずなのにまるで生まれたときからそうしていたかのごとく、大地に生えた草を噛み始めたという。

牛土草の循環から生まれる おいしい牛乳と楽しい暮らし

ただ一面に立ち込めた 牧場の朝の霧の海 ポプラ並木のうっすらと……月

平野らしきものない山口県で高校卒業まで過ごした筆者にとつて、この唱歌のような光景は、いつか見てみたい夢の景色だった。東京都心からわずか80km、高速道路で1時間の場所に、その歌の通りの場所があったとは。

東関東道を東に、成田空港への分岐を過ぎた先で圏央道に入る。利根

川を渡り、稲敷東ICで降りて数分。今通ってきた道の橋脚の立つ利根川河畔に、新利根協同農学塾農場は広がっていた。

土地の広さという絶対的制約に 営農規模や農法を合わせる

採草地込み面積13ha、放牧面積6haに、家族3名で、搾乳頭数32頭、育成牛10頭を飼う。機械投資に見合う規模ではなく、適正頭数を守れば牛は増えない。そんな事業環境で、悩んだ末に2005年に試してみたのが、春から秋に放牧を行ってコストを下げることであった。それまでは牛舎内で輸入飼料を与

え、経費をかけて糞尿を処理していた。しかし放牧にすると、糞尿が草を育て、それを食べた牛が健康になって子牛が増えるという好循環が起きることを、上野さんは大発見したのである。「放牧を始めてみると、乳量は半減しました。でも牛は元気になり、子牛も自然分娩で産まれるようになりました。」

乳量は減るがコストも下がるこのやり方は、輸入飼料と機械に依存し、規模を拡大させながらコスト増に追いつけられない通常のやり方に背を向けるものだった。その3年後にシカゴ穀物相場が高騰したが、粗飼料の国産比率100%を達成していた

分、影響は減殺された。子牛の価格も上がり始めたが、自家繁殖の上野さんにマイナスはなく、プラザ合意で円高の始まった1985年以来下がり続けた乳価の、22年ぶりの反転上昇は、素直に恩恵になった。

「土地の広さという制約を、規模拡大で何とかしようとするのではなく、むしろその制約を受け入れて、売り上げもやり方もそこに合わせてみた」という上野さん。手前味噌ながら、「自分に与えられた時間」という絶対的な制約を尊重し、売り上げ増を目指した組織化などせず一人で責任もつてできる範囲に仕事を絞っている筆者としては、心底共感できる考えだ。

四代にわたって受け継がれる 篤農家の精神

上野さんの牛乳は、放牧乳なので、毎日味が変わる。だがいつ飲んでも、とにかく濃くて味わい深い。「この牛乳は何処で売っているのです

上野 裕



うえの ゆたか

1968年稲敷市生まれ、新利根協同農学塾農場3代目代表（現在は実質個人経営）。90年酪農学園大学卒業後に就農。93年に結婚後、2男1女をもうける。2005年、放牧に転換。14年、子実トウモロコシを栽培する小泉輝夫さんと出会う。



藻谷 浩介（もたに こうすけ）

山口県生まれの56歳。㈱日本総合研究所首席研究員、一般社団法人スマート・テロワール協会理事。平成合併前の全3,200市町村、海外114ヶ国を自費で訪問し、地域特性を多面的に把握。2000年頃から精力的に、地域振興や人口成熟問題に関する研究・著作・講演を行っている。著書に『デフレの正体』、『里山資本主義』（共にKADOKAWA）、『世界まちかど地政学Next』（文藝春秋）など。近著（共著）に『進化する里山資本主義』（Japan Times）、『東京脱出論』（ブクマン社）。日本農業新聞のコラム「論点」に、2014年以来、年2回寄稿中。



管理放牧の牧場。豊かさを感じさせる景観でもある。

か？」といつも聞かれるそう。私も初めて上野さんにお会いした5、6年前に、同じ質問をしたら、農協に出荷してそこで合乳されているのだという。世の多くの酪農家が放牧を選択することで、安く良質の乳製品が普通に社会に供給されること、望むべき未来の姿だと、上野さんは語る。

「私は、自分たち家族が幸せに暮らすため、川沿いの低湿地だったこの土地で農業を続け集落を守るために、手段として放牧を選んだのです。手段である放牧を目的にしてしまえば、農民としての喜びや余裕を失うことになるでしょう。良い経営であっても、良い集落ではなくなってしまうってはいけません」

その集落とは、上野さんの祖父の

上野満氏が15戸の仲間とともに、武者小路実篤直伝の理念を掲げて開拓した場所だ。当初は稲作や養豚も行っていたが、土壌は水気が多く痩せていて、自然に生えるのは雑草だけだった。「開拓仲間の子孫はどんどん離農していき、すっかり限界集落になってしまいました。でもこの雑草が、牛にとっては最高のご馳走なんです」と、3代目の上野さんは語る。趣味の乗馬で出会った奥さんと仲良く暮らす家に、最近、イケメンの息子さんが4代目の後継ぎとして戻ってきた。親子そろって、本当に牛が好きなのだ。

飼料用トウモロコシの国産化に挑む若手農業者を支援

上野さんの牧場から利根川を渡った反対側にある千葉県成田市で、水稻を中心に大規模な農業を営む小泉輝夫さんは、農家の16代目だ。コマ余りの時代に水田の畑地化を模索する小泉さんは、2014年から、飼料用の子実トウモロコシ（葉や茎ではなく、実の部分だけを濃厚飼料として利用）の栽培を試行し始めた。国産の食肉や牛乳はおいしいが、その飼料のほとんどは輸入品であり、特にトウモロコシはほぼ対外依存だ。餌が輸入品であるものを、国産と言えるのだろうか。そういう問題意識で取り組む小泉さんだが、内外のコスト差は大きく、価格競争力が弱い。湿りがちな旧水田でトウモロコシを安定生産するノウハウも模索中だ。

そんな中で上野さんは、小泉さんの国産トウモロコシを、草の生えない冬場を中心に与える飼料として購入している。生産量、価格の両面で、現状では大きなミスマッチがある。だが上野さんは、損得を超えて、日本農業の自立を目指す若い農業者のチャレンジを支援している。

水田だった場所を牧草地に変え、さらに水田だった畑で栽培されるトウモロコシを購入する上野さんのやり方は、水田単作からの脱却を目指す「スマート・テロワール」の哲学を、二重に実践しているものだと言えよう。

事業拡大よりも異業種連携で豊かな地域へ

牛乳を加工したい人に、移住してきてもらうのは大歓迎だという。4年前には、北海道でチーズ作りを修業した若者が移り住んだ。彼も増産に興味のない職人タイプだが、オリジナルなラインナップの味は素晴らしい、地元茨城県稲敷市の、隠れた名産品に成長している。

牛が思い思いに草を食む牧場は、景色も綺麗だ。成田空港まで20分の立地なので、宿泊業や飲食業だって可能性は大きい。「いろんな移住者が増えて、いつの日か、戦後の開村以来貧しすぎて出来なかった祭りを興したい。それが今の夢です」と上野さんは語る。

酪農は、家を空ける訳にはいかない仕事だ。だが息子さんの加入で、趣味の鴨撃ちや、まちおこしに取り組みキーパーソンたちとの交流にも、少しは時間を割けるようになってきた。

ハンチング帽をかぶって散弾銃を構える上野さんの精悍な姿は、どんなイギリス紳士よりも格好いい。牛を愛し、事業の拡張よりも家族との人生を楽しむその生き方は、日本に生きる同世代から見ても眩しいものだ。若い人の素直な眼から見れば、なおさらだろう。筆者も、上野さんと知り合って、その牧場に折々に通って、心が豊かになった一人だ。一人でも多くの人に、同じ体験を味わってほしい。

オンラインセミナー
(コメンテーター：薬谷浩介氏)のお知らせ

スマート・テロワール協会ではZoomによるセミナーを毎月開催中。第3回は3月3日19時～、岩手県西和賀町でワラビなどの生産・加工に携わる「やまに農産」の高橋明氏ほかを迎える。参加費1,000円(税込)。申し込みは st33@nagai-inc.online に空メール送信。